
入浴剤

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

入浴剤

【Nコード】

N0616M

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

バイト仲間の彼には恋人がいる。

だけど一度キスしたら、わたしにもちよっかいを出してくる。

男ってなに。

男って、どうしてそんなことができちゃうの。

でも好き。だって格好いい。

彼が好き。キス以上のことをしたくて、泣きたくなるくらい。

グリーンの入浴剤。

あなたと散歩する夢を見るための。

ブルーの入浴剤。

あなたと笑う夢を見るための。

兄が家を出た日に、あの人の携帯にメールをした。

不安定気味だから会ってくれないと今すぐ泣くよ、と送信すると、困惑したような返事が来た。それはそうだろう。わたしは彼とそんなに親しい訳じゃない。ただちよつと、顔を知っているだけのバイト仲間だ。コンビニのバイトは時間交代で、夜勤の彼と早番のわたしはタツチ交代の時だけ顔を合わせ、ものすごく珍しくあるバイト先の飲み会で会った時も、挨拶ぐらいしかしない仲だったのだから。

「……なんだよ、一体」

呼び出したのはバイト先近くのゲーセン。

「俺、あんたと仲良かったっけ？」

わたしは黙って携帯を握り締めていた。ミニクマのストラップが、夜風にゆらゆら揺れる。

「……不安定って、なに」

わたしは知っている。彼が、バイトの女の子と付き合っているのを。彼女が直接わたしに言ったからだ。彼女の方とは時々一緒に仕事をする事があった。あの背の高い遅番の男の人私の彼氏になったの、と嬉しそうに言われた時、わたしはすぐに嫉妬した。わたしも彼の事が好きだったから。

たとえば、短く切り揃えられた爪だとか、背が高すぎて猫背になっ
てしまっている後ろ姿だとかが。

「お兄ちゃんが家出したの」

「は？」

「うつん、家族には話して行っただけから、厳密に言つと家出じゃないんだけど、でも、なんか家族の生態系が崩れちゃったみたいで、不安定、なの」

「生態系？」

ジーンズの細い脚は、きつとわたしの脚より細い。

彼は、眼鏡の奥で静かな目をしている。

「それで、俺にどうして……」

欲しい訳、と彼が言うのと同時にわたしはその身体に抱きついた。

「……抱っこ、して」

「俺、あんたの兄貴に似てんの？」

「え、全然、」

似てないよ、と言った時、彼がちょっとだけかがんできて、わたしの唇にキスをした。力いっぱい抱き付いていたはずなのに、わたしはすごく驚いた。

「女子高生が、そんなうかつに男に抱きついたりすると怖い目に会うぞ」

わたしの長い髪を、彼が撫でる。

笑っている、と思った。

他の女を彼女にしているくせに、わたしとキスできちゃう男って、なに。

キス、って、もっと特別な何かなんじゃ、ないの。

「お前、なんか可愛いな」

クールな眼鏡の奥でそんな風にちよつと馬鹿にされたように言われて、わたしは不安定なのはこの人を好きになせいだ、とやっと気付いて、今度は逃げようとしたのだけれど、手首を掴まえられて、結局もう一度キス、された。

ピンクの入浴剤。

あなたと幸せになる夢を見るための。

オレンジの入浴剤。

あなたの手を握る夢を見るための。

バイト先の人達とカラオケに行った。彼は、当たり前のように恋人の隣に座った。

でも、彼の右側はわたし。

「最近の子って何歌うんだろうね」

オーナーだけがはしゃいでいて、わたしはメニューに目を一通り通してから、飲みたくもないオレンジジュースを注文してもらった。

「電気消しちやおうよ」

「賛成、明るいところで歌ってもおもしろくねえよな」

バイトの人達は大学生が多い。みんな、お酒を飲むんだな、なんて、ぼんやりと思っているうちに、みんな勝手に歌い出した。

「あんたは歌わないの？」

ぼんやり、を続行していたら、右側から声がかかった。他人の歌声に紛れているはずなのに、どうして彼の声は真っ直ぐわたしに届いてしまうのだろう。

「うたわ、ない」

苦手だから、と言ったのに、彼は暗い部屋の中でそつとわたしの右手を触った。

隣に恋人がいるくせに、と、思い切り睨んでやったのに、彼はまた眼鏡の奥でクールに笑っただけだった。

彼の人差し指が、わたしの手を撫でている。

彼の右側には、何も知らない彼の恋人が笑っている。

男って、なに。

どうしてこんな事ができるんだろう。

そして、どうしてこんなことをする男なんか、わたしはドキドキしてしまつて堪らないのだろう。

好き。

キスして欲しい、と思ったから、わたしは彼を部屋の外へ連れ出したくて仕方がない想いではちきれそうになっていた。トイレとか

に引きずり込んで、ジーンズ引き降ろしてシャツのボタンも全部外して、身体中に滅茶苦茶キスしたかった。この人に犯されたいと思った。犯したいと思った。

処女なのに、なんの経験も伴わないのに、わたしは彼に欲情して、そして誰の歌声も耳に入らないまま、少し泣きそうになっていた。

乳白色の入浴剤。

あなたの真実を覆い隠す夢を見るための。

紫の入浴剤。

あなたに溺れてしまつわたしのための。

わたしの趣味は、入浴剤を集める事だ。

気分によって、色を変えてお風呂に入る。家族はわたしの趣味だからと納得してくれているので、あまり文句を言わずにいてくれる。性欲の色は紫だと、聞いた事があった。

わたしはカラオケから帰ってくると、一旦お風呂の栓を抜いてお湯を張りなおす。紫色の入浴剤を入れると、大抵のその色がそうであるように、ありきたりなラベンダーの匂いがした。セックスする時って、痛いのかな。

わたしの初めてが、彼であればいいと思うのは、思うのはきっと勝手だ。

キスしたいと思う事だって。

そして、多分望めば、彼はわたしとセックスしてくれるだろう。再びキスだってしてくれるだろう。恋人がいても、全然平気な顔でそれをずるいと思って、でもそれでも彼を恰好良いと、思った。彼を、好きだと、思った。

わたしが、背伸びしたいだけの年頃であろうとも。

彼は確かに恰好良くて、大人に見えた。

わたしは彼に欲情して、そして彼の恋人なんか、どうでもいいや

と思っていた。裏切るのなんて、恐くも何ともない。
赤信号だつて、みんなで渡れば車が停まる。

紫の入浴剤。

あなたに溺れてしまふ、わたしの、ため、の。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0616m/>

入浴剤

2010年10月8日14時39分発行